

令和 7 年度

知床半島先端部地区利用状況調査業務 報告書



令和 7 (2025 年) 12 月

公益財団法人 知床財団



# 報告書概要

## 業務名

令和7年度 知床半島先端部地区利用状況調査業務

## 業務目的

本業務は、知床国立公園の適正な利用を推進する上で必要な基礎データを収集することを目的とし、先端部地区を利用する利用者の動向を現地での聞き取り調査により把握した。

## 業務実施体制

本業務は、環境省からの請負業務として、公益財団法人 知床財団が実施した。

## 実施概要

### (1) 入域調査

先端部地区利用者への聞き取り調査は、2025年7月24日から7月27日及び8月8日から8月11日の計8日間行い、計33組70名から回答を得た。調査場所は、先端部地区の入り口である相泊の入林箱付近である。聞き取り項目は、グループ人数、年齢層、利用形態、目的地と行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサフィールドハウス(以下、「ルサFH」とする)への立ち寄りの有無、知床半島先端部地区 利用の心得とそのWebサイトである「シレココ」の認知状況である。

### (2) 2020年度から2025年度に実施した入域調査結果の取りまとめ

先端部地区利用者の動向を把握するための入域調査は、2020年度から同様の形式で実施されており、2025年度までの累計で261組を対象に聞き取りを実施している。本業務ではこれらのデータを統合し、①利用形態、②ヒグマ対策の有無、③ルサFHへの立ち寄り状況、④利用の心得はたはシレココの認知状況の4点に着目した経年変化を分析した。

### (3) その他

業務実施中に「利用の心得」から逸脱した不適切な利用（不十分なヒグマ対策、たき火の実施、ゴミの投棄、番屋への宿泊、釣魚の投棄等）が認められた場合には、利用者に「利用の心得」について説明を行った。

また、業務実施中に、コース上の難所の状況変化（落石や崩落等）、ヒグマ出没情報等について確認した場合は記録を行うとともに、その情報をルサFHに提供した。なお、これらの結果については、(1) 入域調査の結果と一体的に報告する体裁とした。

## 目次

はじめに .....	1
1. 先端部地区利用状況の調査方法.....	2
1-1 調査方法 .....	3
1-2 2025 年度の調査期間の設定 .....	3
2. 2025 年度の調査結果 .....	4
2-1 入域調査の結果.....	4
2-2 分析結果 .....	5
2-3 その他実施項目.....	16
3. 2020 年度から 2025 年度における入域調査のとりまとめ .....	17
3-1 分析結果 .....	18
4. まとめと考察 .....	28

## 資料編

巻末資料 1 2025 年度 知床半島先端部地区 利用状況調査表

巻末資料 2 2025 年度 知床半島先端部地区利用状況調査 入域調査の結果一覧

## はじめに

知床半島先端部地区（以下、「先端部地区」とする）は極めて原始性の高い自然環境と豊富な野生生物によって形成される多様な生態系が残されている地域であり、利用のための施設が設けられていないなど、一般の利用者による積極的な利用は想定されていない。一方で、知床ならではの質の高い自然体験の機会を求めて多様な利用者が訪れる場所でもあり、適正な利用と保全との両立を図ることが必要である。

環境省では、原始性の高い自然環境の保全と質の高い自然体験機会の提供を両立するため、レクリエーションを目的として先端部地区を利用する際のルール「知床半島先端部地区利用の心得」（以下、「利用の心得」とする）を定めるとともに、知床世界遺産ルサ FH 等の施設で先端部地区利用者へのレクチャーを実施している。さらに、知床半島先端部地区利用の心得 Web サイト、通称「シレココ」（以下、「シレココ」とする）を作成し普及活動に努めるなど、自然環境の保全を前提とした適切な先端部地区の利用を推進してきた。一方で近年、利用状況の変化や利用ニーズの多様化が指摘されており、実態を把握するための調査を行う必要性が高まってきている。

本業務は、知床国立公園の適正な利用の推進に必要な基礎データを収集するため、先端部地区を利用するトレッカーやカヤッカー、釣り人の動向を調査し、その結果についてまとめたものである。

## 1. 先端部地区利用状況の調査方法

先端部地区の利用状況を把握することを目的として、羅臼町相泊の海岸線トレッキング始点となる地点で入域調査を実施した（図 1-1）。調査方法や日程の設定については次項にまとめた。

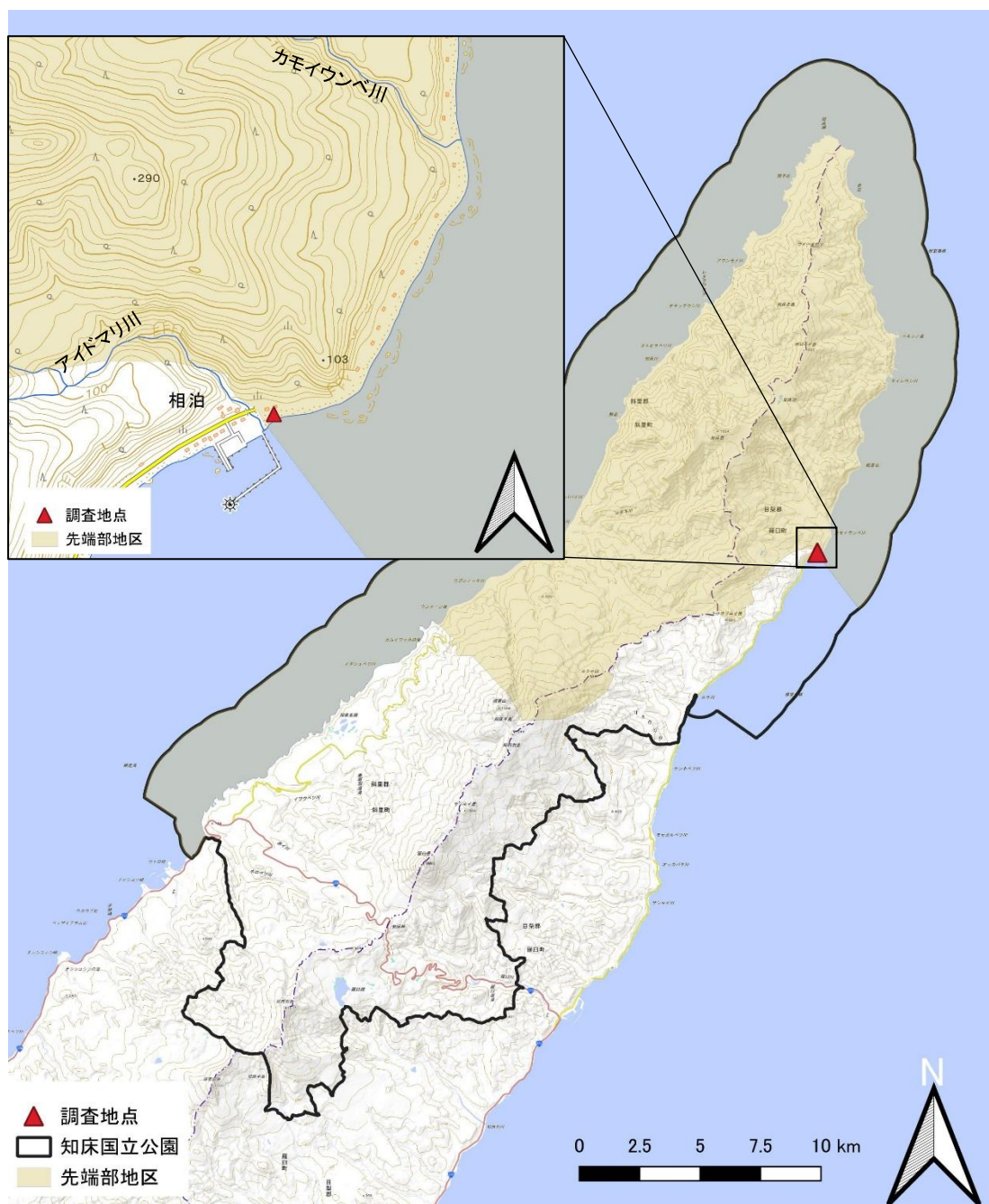


図 1-1 知床半島先端部地区の区域と利用状況調査の調査地点<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 国土地理院 (<https://www.gsi.go.jp/>)

## 1-1 調査方法

調査方法は「トレッキング」、「シーカヤック」、「釣り」及び上記に該当しない先端部地区利用の形態「その他」と分類・定義し（表 1-1）、該当した利用者より聞き取りを行った。また、先端部地区でのレクリエーション目的以外で相泊へ来訪した人を来訪組数として目視でカウントを行った。

調査項目は、過年度からの項目に従い「グループ人数、年齢層、利用形態、目的地と行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサ FH への立ち寄りの有無（ルサ FH へ立ち寄りがあった場合、レクチャー受講の有無の確認。立ち寄りが無かった場合、立ち寄らなかった理由を聞き取り。）、利用の心得及びシレココの認知状況」を基本事項とし、調査表を作成した（巻末資料 1）。

表 1-1 調査対象と利用形態別の定義

利用形態	定義	調査対象
トレッキング	カモイウンベ川以北に入域するトレッカー。	○
シーカヤック	相泊橋以北を利用するカヤッカー。SUP やゴムボート等を含む。	○
釣り	相泊橋以北で釣りをする人。	○
その他	上記に当てはまらない先端部利用の形態。 例：調査、取材等	○
来訪組数	先端部地区でのレクリエーション目的以外で相泊へ来訪した利用者。組数のみ目視カウント。	△

## 1-2 2025 年度の調査期間の設定

調査期間については、環境省担当官と協議の上、先端部地区のハイシーズンにあたる 7 月～8 月のうち大潮付近かつ利用者が多いと想定される各月 4 日間の計 8 日間に設定した（表 1-2）。また調査時間は 4:00～18:00 の 16 時間に定め、前半 4:00～11:00、後半 11:00～18:00 と 2 分割し、それぞれ人員を 1 名ずつ配置した。

表 1-2 2025 年度の入域調査日程における月齢<sup>2</sup>と潮見表<sup>3</sup>

日付	曜日	月齢	満潮		干潮	
			時刻	潮位 (cm)	時刻	潮位 (cm)
7月24日	木	28.7	0:49	125	9:30	5
7月25日	金	0.3	1:51	128	10:07	7
7月26日	土	1.3	2:46	128	10:39	12
7月27日	日	2.3	3:36	124	11:07	20
8月8日	木	14.3	0:57	121	9:09	14
8月9日	金	15.3	1:51	126	9:41	13
8月10日	土	16.3	2:40	127	10:10	16
8月11日	日	17.3	3:27	125	10:37	22

\*19 時頃の月齢を示す。満月の月齢が 15 前後とされている。

\*満干潮が存在しない場合は「-」としている。

## 2. 2025 年度の調査結果

### 2-1 入域調査の結果

先端部地区利用者を対象とした入域調査は、計 8 日間実施し 33 組 70 名より回答を得た（表 2-1）。前年度に比べ回答数が減少した（2024 年度 37 組 77 名）。また目視で確認した来訪組数は 147 組であった。

表 2-1 2025 年度の入域調査の実施結果

日付	天気	調査時間		データ	データ
		開始	終了	取得数	取得人数
7月24日	晴	4:00	18:00	2	3
7月25日	晴/曇	4:00	18:00	3	6
7月26日	曇	4:00	18:00	3	4
7月27日	曇/晴	4:00	18:00	5	14
8月8日	曇/晴	4:00	18:00	3	10
8月9日	曇	4:00	18:00	8	16
8月10日	曇	4:00	18:00	6	13
8月11日	晴/曇	4:00	18:00	3	4

<sup>2</sup> 国立天文台 (<https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/dni/dni01.html>)

<sup>3</sup> 気象庁 ([https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/tide/suisan/s\\_hokkaidoe.php](https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/tide/suisan/s_hokkaidoe.php))

## 2-2 分析結果

利用形態別の回答組数は、シーカヤック 1 組 2 名、トレッキング 18 組 33 名、釣り 13 組 25 名であった（表 2-2）。利用形態別の割合ではトレッキングが 54.5%と最も高く、次いで釣りが 39.4%、シーカヤックとその他が 3.0%であった（図 2-1）。なお、その他の 1 組は帰着予定日を 3 日過ぎても帰着しなかったトレッカーを捜索するため、中標津警察 4 名、羅臼消防 6 名の計 10 名が入域したものである。例外的な入域であるため、以降の分析からは除外した。

表 2-2 利用形態別の聞き取り調査結果

日付	シーカヤック		トレッキング		釣り		その他(捜索)		全体	
	(組)	(人)	(組)	(人)	(組)	(人)	(組)	(人)	(組)	(人)
2025/7/24	1	2	1	1	0	0	0	0	2	3
2025/7/25	0	0	1	4	2	2	0	0	3	6
2025/7/26	0	0	1	1	2	3	0	0	3	4
2025/7/27	0	0	2	2	2	2	1	10	5	14
2025/8/8	0	0	1	2	2	8	0	0	3	10
2025/8/9	0	0	7	14	1	2	0	0	8	16
2025/8/10	0	0	3	7	3	6	0	0	6	13
2025/8/11	0	0	2	2	1	2	0	0	3	4
合計	1	2	18	33	13	25	1	10	33	70

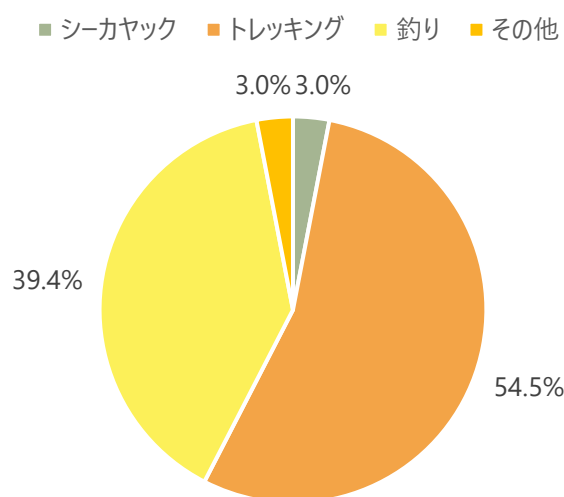


図 2-1 利用形態別の入域割合

### 2-2-1 グループサイズ

先端部地域に入域したグループサイズは、1名のみの単独、2～4名の小グループ、5～7名の中グループ、8名以上の大グループの4つに分類した。全体で最も組数の多かったグループサイズは小グループの16組で、次いで単独の15組、中グループの1組であった。大グループは確認されなかった（表2-3）。

利用形態別のグループサイズは、シーカヤックは小グループが1組（100%）、トレッキングは単独と小グループが9組（50%）ずつ、釣りは単独と小グループが6組（46.2%）ずつ、中グループが1組（7.7%）であった（図2-2）。

表 2-3 利用形態別グループサイズごとの組数

利用形態 (組)	グループサイズ				合計
	単独	小グループ (2～4名)	中グループ (5～7名)	大グループ (8名以上)	
シーカヤック	0	1	0	0	1
トレッキング	9	9	0	0	18
釣り	6	6	1	0	13
合計	15	16	1	0	32

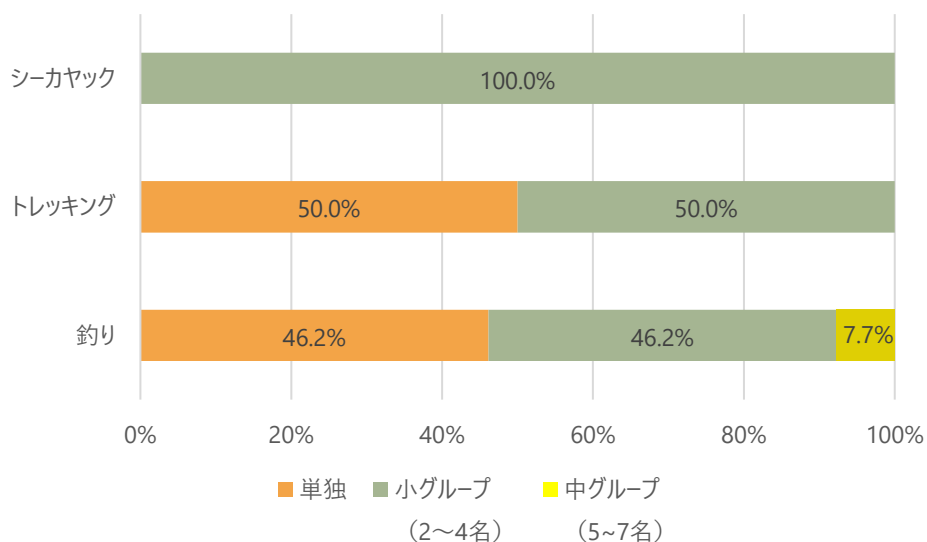


図 2-2 利用形態別グループサイズの割合

### 2-2-2 利用者数の年代

利用者の年代は、利用形態ごとの人数で集計を行った。全体で最も多かった年代は20代の17人で、次いで40、50代が11人、30代が9人と続いた（表2-4）。

利用形態別で最も多かった年代は、シーカヤックが40代と50代、トレッキングが20代と30代、釣りが20代であった（図2-3）。本年は釣り利用者の総数が減少する中、釣り利用者に20代6名のグループがいたため、釣り利用者における20代の割合が押し上げられる形となった。

表 2-4 利用形態別の利用者の年代

利用形態 (人)	年代									合計
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代 以上	不明	10代未満	
シーカヤック	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
トレッキング	0	7	7	6	10	1	0	2	0	33
釣り	0	10	2	4	0	3	0	5	1	25
合計	0	17	9	11	11	4	0	7	1	60

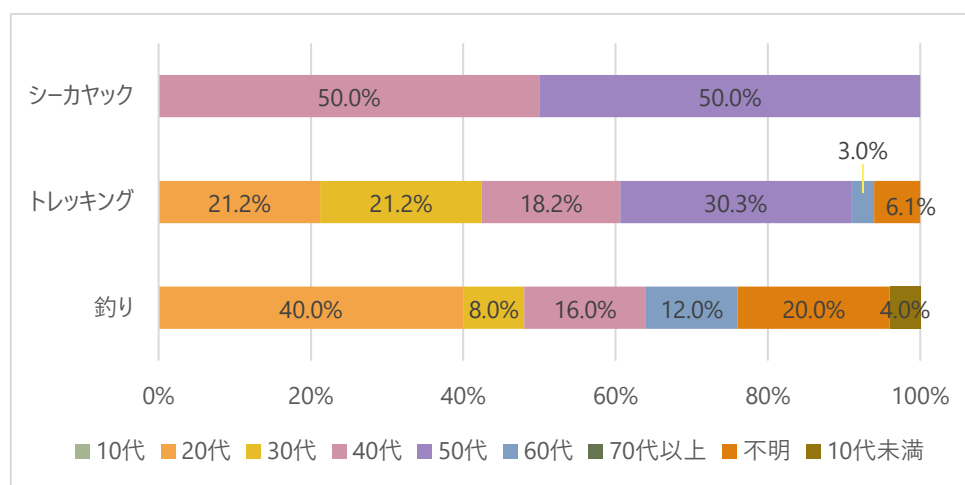


図 2-3 利用形態別グループサイズの割合

### 2-2-3 ヒグマ対策の状況

利用形態別のヒグマ対策の有無を表 2-5 に示す。トレッキング利用者はほとんどがヒグマ対策を講じていたが、釣り利用者はほぼ半数の 6 組がヒグマ対策を講じておらず、その 6 組は全て相泊川河口にて釣りを行っていた。(図 2-4)。

ヒグマ対策を講じていた 23 組では、クマスプレーの所持率が 40.4%、クマ鈴の所持率が 36.8%であり、この 2 つのヒグマ対策用品を所持していた回答者のほとんどは、どちらか一方ではなく、クマスプレーとクマ鈴の両方を所持していた(表 2-6)。

表 2-5 利用形態別のヒグマ対策の状況

利用形態 (組)	ヒグマ対策の状況			合計
	有	無	不明	
シーカヤック	0	0	1	1
トレッキング	16	1	1	18
釣り	7	6	0	13
合計	23	7	2	32

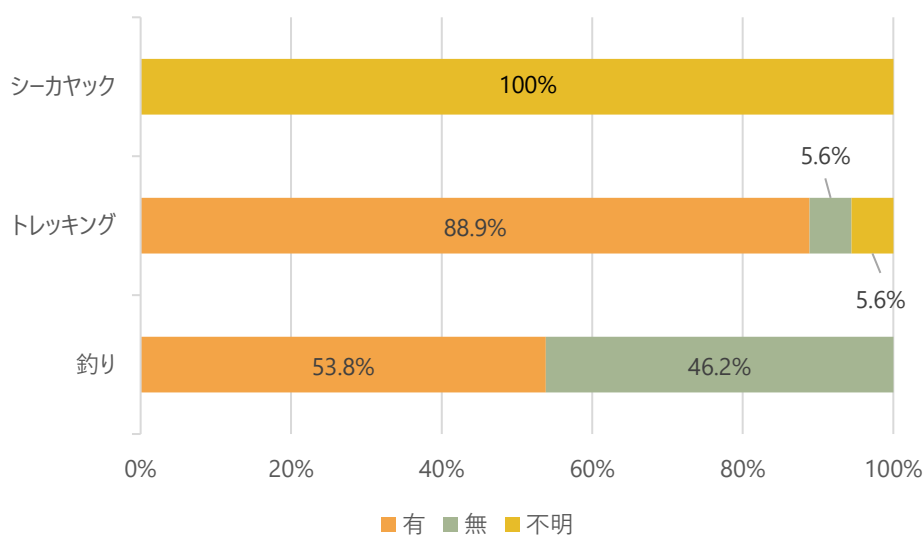


図 2-4 利用形態別のヒグマ対策

表 2-6 利用形態別のヒグマ対策一覧

利用形態 (組)	ヒグマ対策グッズ一覧					合計
	クマスプレー	フードコンテナ	クマ鈴	笛	その他	
シーカヤック	0	0	0	0	0	0
トレッキング	16	3	15	7	1	42
釣り	7	0	6	1	1	15
合計	23	3	21	8	2	57
割合	40.4%	5.3%	36.8%	14.0%	3.5%	100%

\*その他内訳：爆竹、ナイフ

#### 2-2-4 ルサ FH の立ち寄り組数とレクチャー受講

ルサ FH の立ち寄り及びレクチャー受講の有無を利用形態別に表 2-7 に示す。利用形態別のルサ FH 立ち寄り率はトレッキング利用者が 44.4%、釣り利用者が 7.7%であった。また、利用形態別のレクチャー受講率はトレッキング利用者が 44.4%、釣り利用者が 0%であった(図 2-5)。なお、トレッキング利用者のルサ FH 立ち寄り率とレクチャー受講率は同率だがルサ FH へ立ち寄ったがレクチャーは受講しなかった利用者が 1 組、電話レクチャーのみを受講しルサ FH へは立ち寄りなかった受講者が 1 組いたため、ルサ FH へ立ち寄ったトレッキング利用者全員がレクチャーを受講していたわけではない。

ルサ FH へ立ち寄りなかった、あるいはレクチャーを受講しなかった理由を抜粋し以下に記載する。

<ルサ FH へ立ち寄りなかった理由>

- 電話でルサ FH に連絡したため。(トレッキング)
- 今年で釣りに来るのが 4 年目だから。(釣り)
- 前日の夜に羅臼に到着したため。(トレッキング)
- ルサ FH の存在を知らなかったため。(釣り)
- 特段の理由はない。(釣り)

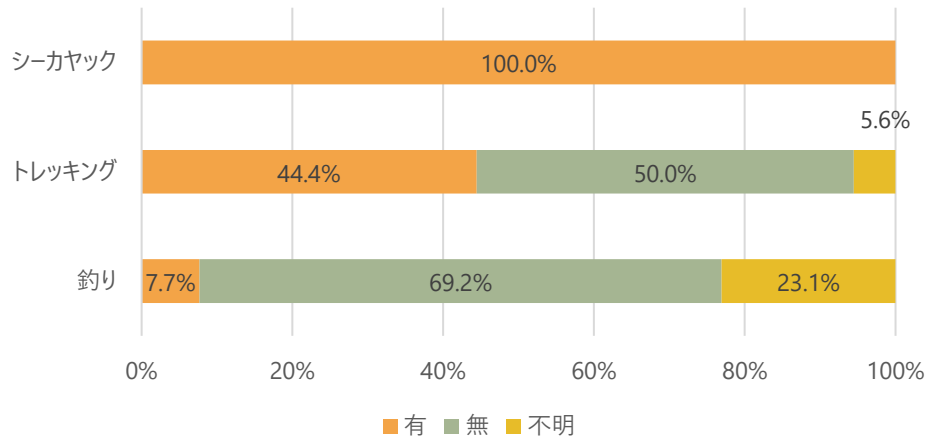
<レクチャーを受講しなかった理由>

- パーティの内 1 名が知床岬へ行くのが 2 回目だから。(トレッキング)
- 去年ルサ FH に立ち寄って情報を得たため。(釣り)
- 以前レクチャーを受講したことがあるため。(トレッキング)
- 事前にネットで調べたため。(トレッキング)

表 2-7 利用形態別のルサ FH への立ち入り及びレクチャー受講状況

利用形態 (組)	ルサ FH への立ち寄り				レクチャー受講			
	有	無	不明	合計	有	無	不明	合計
シーカヤック	1	0	0	1	1	0	0	1
トレッキング	8	9	1	18	8	9	1	18
釣り	1	9	3	13	0	10	3	13
合計	10	18	4	32	9	19	4	32

### ルサFHへの立ち寄り率



### レクチャー受講率

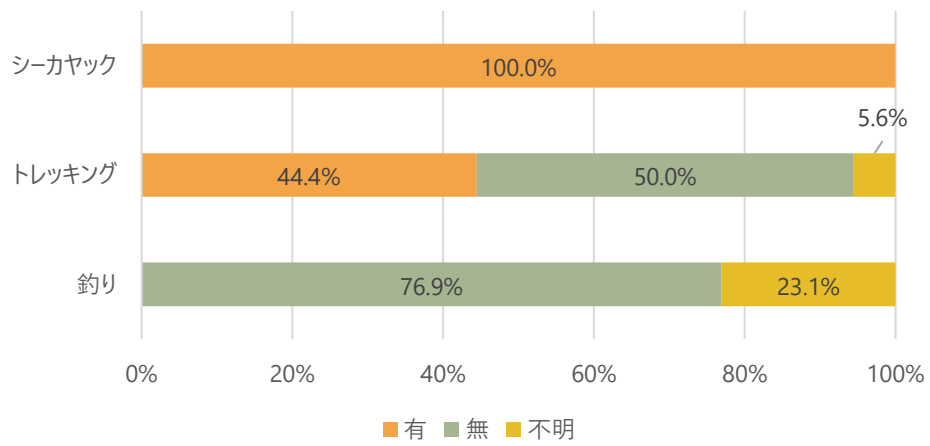


図 2-5 ルサ FH への立ち寄り及びレクチャー受講率

### 2-2-5 利用の心得またはシレココの認知状況

利用の心得またはシレココの認知状況を表 2-8 に示す。利用の心得またはシレココを認知していると回答した割合は、シーカヤック 100%、トレッキング 72.2%、釣り 7.7%であった（図 2-6）。

認知していない利用者には、利用の心得及びシレココの周知を行った。

表 2-8 利用形態別の利用の心得またはシレココの認知状況

利用形態 (組)	認知の有無			合計
	有	無	不明	
シーカヤック	1	0	0	1
トレッキング	13	3	2	18
釣り	1	9	3	13
合計	15	12	5	32

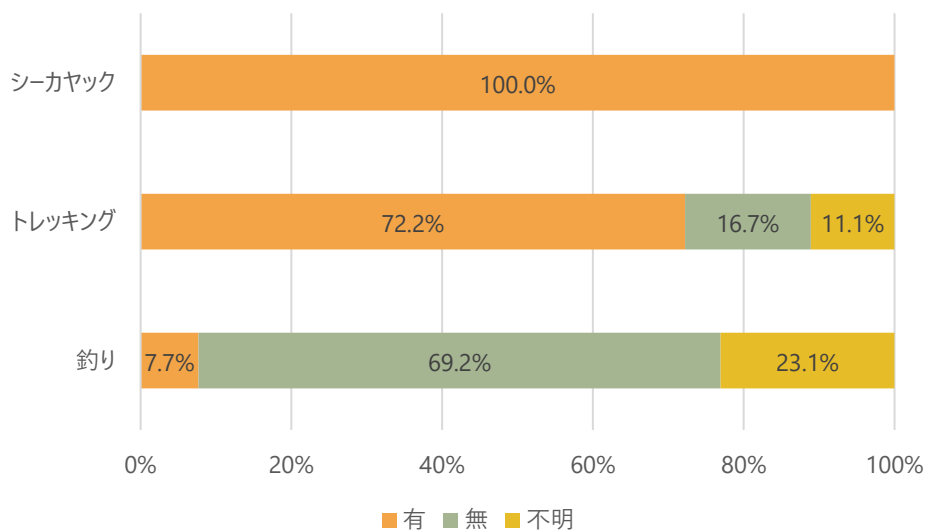


図 2-6 利用形態別の利用の心得またはシレココの認知状況

## 2-2-6 利用者の行動予定

先端部地区利用者の行動予定を把握するため、目的地と野営地点の聞き取りをそれぞれ行った。

利用形態別の目的地を表 2-7 に示す。トレッキング利用者の目的地の内最多は知床岬（18 組中 14 組）、釣り利用者の目的地の内最多は相泊川（13 組中 6 組）だった。目的地をその他と回答した 3 組の回答は、知床半島周回（シーカヤック利用者）、行けるところまで（トレッキング利用者）、未定（釣り利用者）、であった。

表 2-7 利用形態別目的地数（組数）

	知床岬	相泊川	観音岩	カモイウ ンベ川	クズレハ マ川	ウナキベ ツ川	その他	合計
シーカヤック	0	0	0	0	0	0	1	1
トレッキング	14	0	1	2	0	0	1	18
釣り	0	6	0	3	2	1	1	13
合計	14	6	1	5	2	1	3	32

\*利用形態別に最も多かった目的地をオレンジ色に網掛け。

利用形態別の野営地点ごとの訪問回数を表 2-8 に示す。野営の伴う利用者のほとんどはトレッキング利用者であり、二本滝、次いでペキンの鼻を多く利用していた（図 2-7）。

表 2-8 野営地点別訪問回数（組数）

野営地	トレッキング	釣り	シーカヤック	合計
観音岩	1	0	0	1
ペキンの鼻	4	0	0	4
近藤ヶ淵	1	0	0	1
二本滝	15	0	0	15
ニカリウス	1	0	0	1
知床沼	1	0	0	1
不明	0	0	1	1

\*最も多かった野営地点をオレンジ色に網掛け。

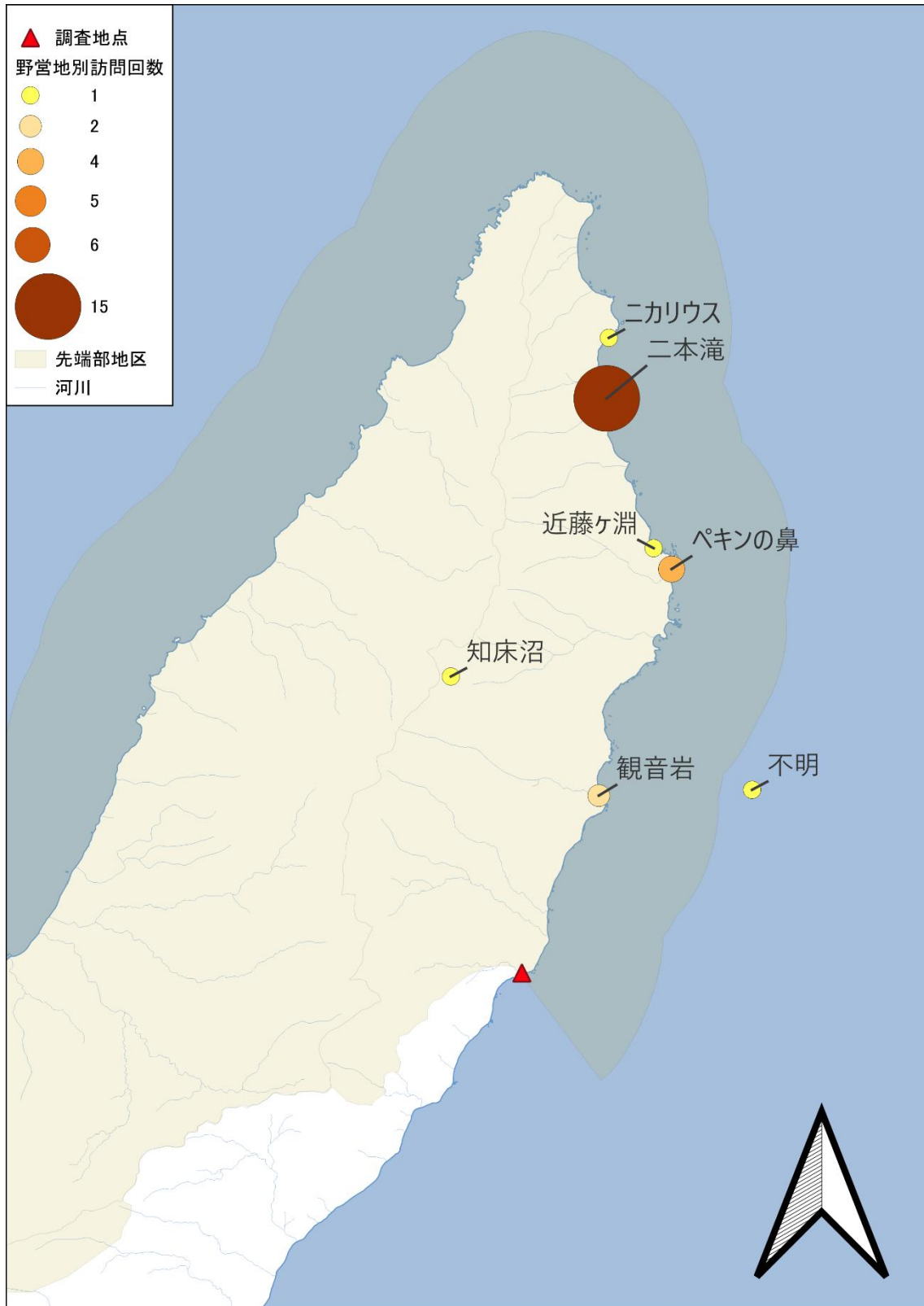


図 2-7 野営地別訪問回数の地図  
(野営地点「不明」は海域に設定)

先端部地区利用者の組ごとの詳細な行動予定を表 2-9 に示す。本調査における最大滞在日数はトレッキング利用者の 4 泊 5 日であった。

表 2-9 組毎の先端部地区利用者の行動予定

No.	日付	利用形態	人数	滞在日数	目的地	野営地点				
						1泊目	2泊目	3泊目	4泊目	5泊目
1	7月24日	シーカヤック	2	4	半島周回					
2	7月24日	トレッキング	1	4	知床岬	二本滝	二本滝	二本滝		
3	7月25日	トレッキング	4	5	知床岬	知床沼			赤岩～二本滝	
4	7月26日	トレッキング	1	1	カモイウンベ川					
5	7月27日	トレッキング	1	3	知床岬					
6	7月27日	トレッキング	1	1	観音岩					
7	8月8日	トレッキング	2	3	知床岬	ベキンの鼻	二本滝			
8	8月9日	トレッキング	2	3	知床岬	二本滝	二本滝			
9	8月9日	トレッキング	1	3	知床岬	二本滝	二本滝			
10	8月9日	トレッキング	3	3	知床岬	ベキンの鼻	二本滝			
11	8月9日	トレッキング	2	3	知床岬	二本滝	二本滝			
12	8月9日	トレッキング	2	1	カモイウンベ川					
13	8月9日	トレッキング	3	3	知床岬					
14	8月9日	トレッキング	1	4	知床岬	観音岩	二本滝	二本滝		
15	8月10日	トレッキング	2	3	知床岬	二本滝	二本滝			
16	8月10日	トレッキング	4	3	知床岬	ベキンの鼻	ベキンの鼻			
17	8月10日	トレッキング	1	3	知床岬	ニカリウス	近藤ヶ淵			
18	8月11日	トレッキング	1	3	知床岬					
19	8月11日	トレッキング	1	1	行けるところまで					
20	7月25日	釣り	1	1	ウナキベツ川					
21	7月25日	釣り	1	1	クズレハマ川					
22	7月26日	釣り	2	1	相泊					
23	7月26日	釣り	1	1	相泊					
24	7月27日	釣り	1	1	カモイウンベ川					
25	7月27日	釣り	1	1	相泊					
26	8月8日	釣り	6	1	カモイウンベ川					
27	8月8日	釣り	2	1	相泊					
28	8月9日	釣り	2	1	未定					
29	8月10日	釣り	3	1	相泊					
30	8月10日	釣り	2	1	相泊					
31	8月10日	釣り	1	1	クズレハマ川					
32	8月11日	釣り	2	1	カモイウンベ川					

## **2-3 その他実施項目**

### **2-3-1 利用者指導**

調査実施にあたっては、「利用の心得」から逸脱した不適切な利用（不十分なヒグマ対策、たき火の実施や不始末、番屋への宿泊、釣魚の投棄等）が認められた場合に利用者指導を行うこととなっていたが、今年度の調査では聞き取り等から不適切な利用は認められず、利用者指導は行わなかった。

### **2-3-2 ヒグマ情報について**

利用者からヒグマの目撃があった場合は、聞き取りを行い、速やかに羅臼町及び知床財団へ通報を行った。今年度の調査期間では、二本滝付近で3件、知床岬台地にて1件の目撃情報があった。

### **2-3-3 入林簿の記載**

今年度より相泊の入林簿が廃止されたため、入林簿の記載状況については記録していない。計画書の提出状況については後述する。

### 3. 2020 年度から 2025 年度における入域調査のとりまとめ

先端部地区の利用状況を把握するため、先端部地区利用者を対象に 2011 年度から 2020 年度にかけてカラフトマス釣りの瀬渡し船を利用した船舶調査を実施しており、10 年間で 60 組のデータが収集されてきた<sup>4</sup>。しかし、年間平均 6 組と得られるデータ数と調査努力量がつり合わない現状であったため、2020 年度から船舶調査と並行し、先端部地区の始点である相泊での入域調査を開始した。船舶調査と比較して入域調査の聞き取り件数が多かったことから、本調査は 2021 年度より入域調査にシフトした（表 3）。

本章では、入域調査を開始した 2020 年度から 2025 年度に得られた 261 組の調査データを「トレッキング」「シーカヤック」「釣り」に分類し、①利用形態の経年変化、②ヒグマ対策の状況、③ルサ FH への立ち入り状況、④ルサ FH でのレクチャー受講状況、⑤利用の心得またはシレココの認知状況の 5 つの項目で分析を行った。結果は次項に示す。

表 3 2020 年度からの調査概要と変遷

実施年	期間	日数	聞き取り 組数	備考
2020 年度	7 月 21 日～7 月 25 日	5 日	27 組	2011 年から継続していた船舶調査に加え、相泊付近での入域調査を開始。
2021 年度	7 月 22 日～7 月 25 日 8 月 7 日～8 月 10 日	8 日	47 組	2021 年度より船舶調査が終了し、相泊付近での入域調査のみ継続。
2022 年度	7 月 29 日～7 月 31 日 8 月 11 日～8 月 14 日	8 日	67 組	
2023 年度	7 月 29 日～7 月 31 日 8 月 11 日～8 月 14 日	8 日	51 組	調査項目の「目的地」を「移動経路」に変更。ルサ FH でのレクチャー受講の有無を追加。
2024 年度	7 月 20 日～7 月 23 日 8 月 15 日～8 月 18 日	8 日	37 組	
2025 年度	7 月 24 日～7 月 27 日 8 月 8 日～8 月 11 日	8 日	33 組	調査項目の「移動経路」を「行動予定」に変更。また、「行動予定」に「目的地」を追加。相泊の入林簿が廃止。

<sup>4</sup> 令和 2 年度 知床半島先端部地区利用状況調査業務  
([https://shiretokodata-center.env.go.jp/data/research/report/r02/R02\\_sentanchiku\\_riyou.pdf](https://shiretokodata-center.env.go.jp/data/research/report/r02/R02_sentanchiku_riyou.pdf))

### 3-1 分析結果

#### 3-1-1 利用形態別利用組数の経年変化

利用形態別利用組数の経年変化を表 3-1 に示す。シーカヤック利用者は 10 組以下で推移しており、2025 年度の利用は 1 組と過去最少だった。トレッキング利用者は 2022 年を除き 10 組以上が利用している状況であり、2025 年度は 2024 年度と同数で過去最多の 18 組の利用が確認された。釣り利用者は 2023 年度より減少傾向が続いており、2025 年度は調査日数が 8 日になった 2021 年度以来過去最少の 13 組だった (図 3-1)。

表 3-1 利用形態別利用組数の経年変化

	シーカヤック (組)	トレッキング (組)	釣り (組)	合計 (組)
2020 年度	6	11	10	27
2021 年度	4	15	28	47
2022 年度	4	7	56	67
2023 年度	7	10	34	51
2024 年度	2	18	17	37
2025 年度	1	18	13	32
合計	24	79	158	261

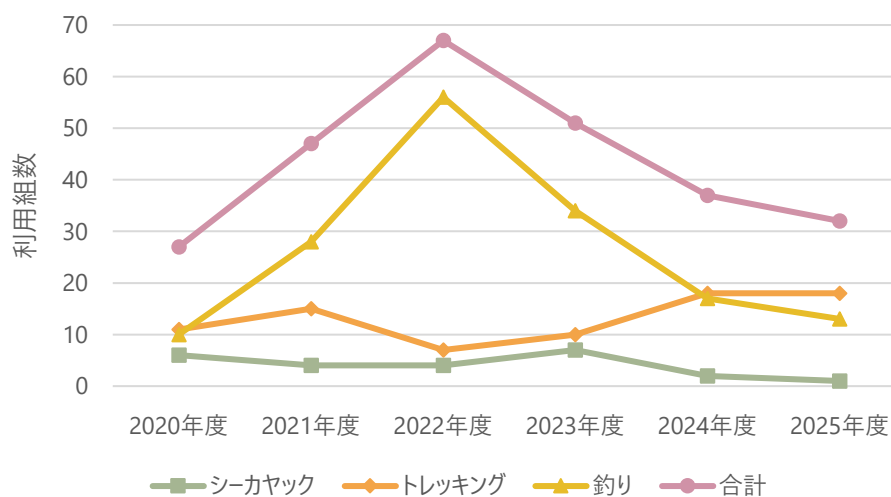


図 3-1 利用形態別利用組数の経年変化 (2020 年度～2025 年度)

### 3-1-2 ヒグマ対策状況の経年変化

ヒグマ対策状況の経年変化を表 3-2 に示す。2023 年度をピークとしてヒグマ対策を講じている組は減少を続けており、2025 年度は 75.0%だった。2025 年度は釣り利用者の約半数が相泊川河口にて釣りを行っており、その組がいずれもヒグマ対策を講じていなかったため、全体としてもヒグマ対策を講じていた割合が減少した。

以下からは利用形態別のヒグマ対策状況の経年変化について述べる。

表 3-2 ヒグマ対策状況の経年変化

	シーカヤック（組）			トレッキング（組）			釣り（組）			合計		
	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明
2020 年度	5	0	1	10	0	1	3	5	2	18	5	4
2021 年度	4	0	0	11	4	0	19	8	1	34	12	1
2022 年度	4	0	0	7	0	0	44	12	0	55	12	0
2023 年度	7	0	0	9	1	0	32	2	0	48	3	0
2024 年度	2	0	0	12	6	0	17	0	0	31	6	0
2025 年度	1	0	0	16	1	1	7	6	0	24	7	1

#### <シーカヤック>

シーカヤック利用者のヒグマ対策状況の経年変化を図 3-2 に示す。2020 年度を除き、毎年シーカヤック利用者の 100%がヒグマ対策を講じており、3 つの利用形態の中で最もヒグマ対策を講じている利用者の割合が高い利用形態であった。

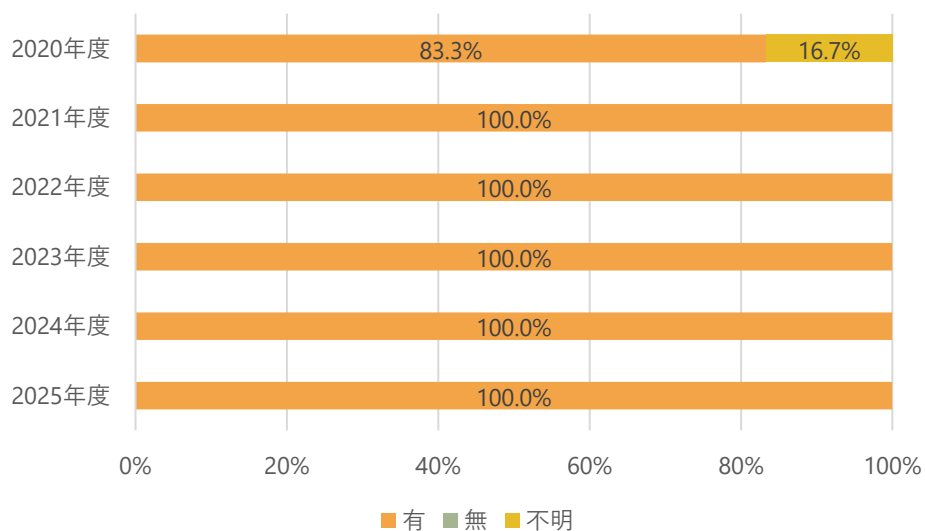


図 3-2 シーカヤック利用者のヒグマ対策状況の経年変化  
(2020 年度～2025 年度)

### <トレッキング>

トレッキング利用者のヒグマ対策状況の経年変化を図 3-3 に示す。ヒグマ対策を講じている割合が90%前後となる年が多いものの、2021年度と2024年度は70%前後であった。

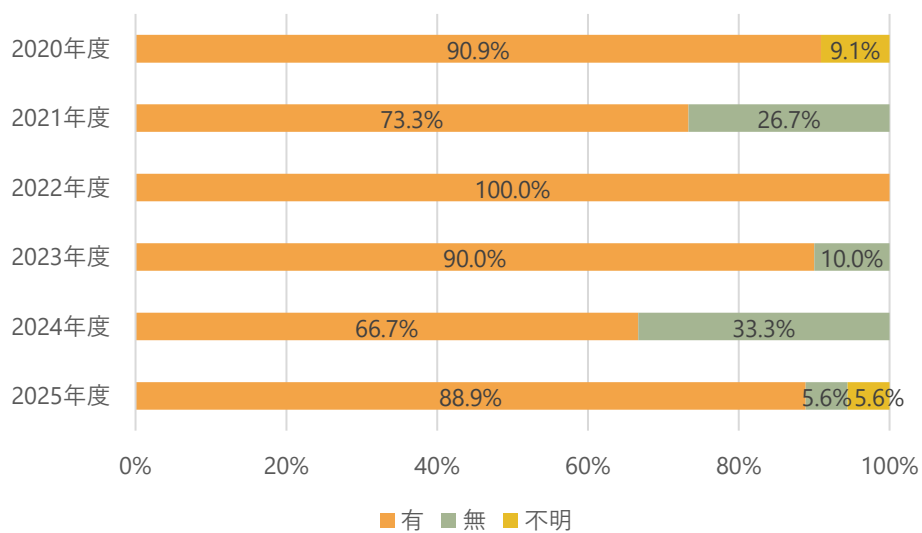


図 3-3 トレッキング利用者のヒグマ対策状況の経年変化  
(2020年度～2025年度)

### <釣り>

釣り利用者のヒグマ対策状況の経年変化を図 3-4 に示す。2024 年度までは一貫してヒグマ対策を講じている利用者の割合が増加していたが、2025 年度は大きく減少した。これは 2025 年度の釣り利用者の約半数が相泊川河口にて釣りを行っており、その組がいずれもヒグマ対策を講じていなかったためである。

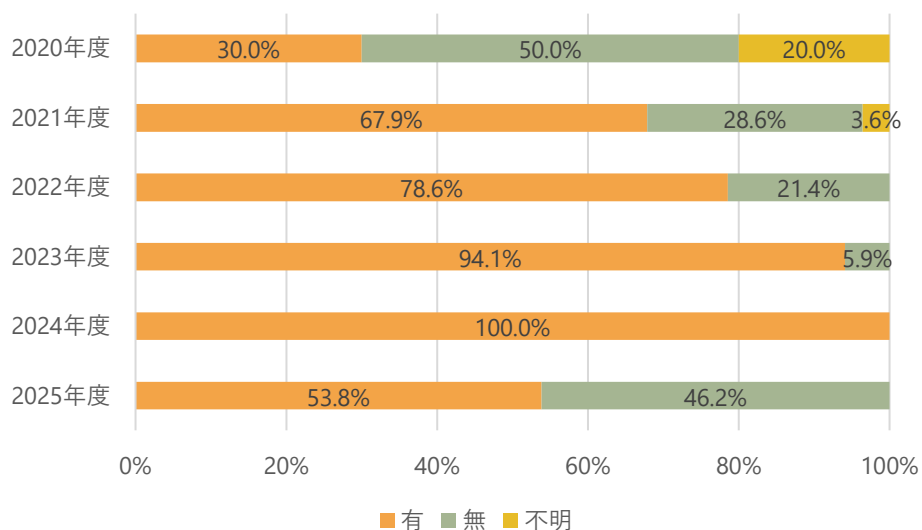


図 3-4 釣り利用者のヒグマ対策状況の経年変化  
(2020 年度～2025 年度)

### 3-1-3 ルサ FH 立ち寄り状況の経年変化

ルサ FH 立ち寄り状況の経年変化を表 3-3 に示す。全体としてルサ FH に立ち寄っている利用者より、立ち寄っていない利用者が多かった。

以下からは利用形態別の経年変化について述べる。

表 3-3 利用形態別のルサ FH 立ち寄り数

	シーカヤック（組）			トレッキング（組）			釣り（組）			合計		
	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明
2020 年度	2	4	0	6	5	0	0	6	4	8	15	4
2021 年度	1	3	0	6	9	0	2	25	1	9	37	1
2022 年度	2	2	0	7	0	0	17	38	1	26	40	1
2023 年度	2	5	0	4	6	0	2	32	0	8	43	0
2024 年度	0	2	0	8	10	0	2	14	1	10	26	1
2025 年度	1	0	0	8	9	1	1	9	3	10	18	4

#### <シーカヤック>

シーカヤック利用者のルサ FH 立ち寄り状況の経年変化を図 3-5 に示す。2024 年度のルサ FH 立ち寄り 0%を除き、20~30%以上がルサへ立ち寄っている。ここ 2 年のシーカヤック利用組数は 2024 年度は 2 組、2025 年度は 1 組のため、ここ 2 年の立ち寄り率は極端な数字となっている。

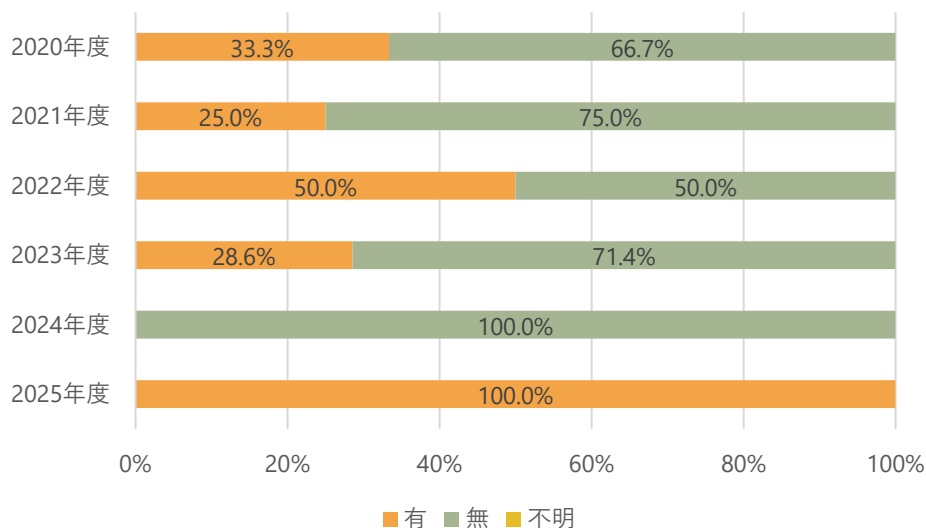


図 3-5 シーカヤック利用者のルサ FH への立ち寄り状況の経年変化 (2020 年度～2025 年度)

### <トレッキング>

トレッキング利用者のルサ FH への立ち寄り状況の経年変化を図 3-6 に示す。2022 年度の 100%を除き、トレッキング利用者は概ね 40～50%前後がルサ FH に立ち寄っていた。

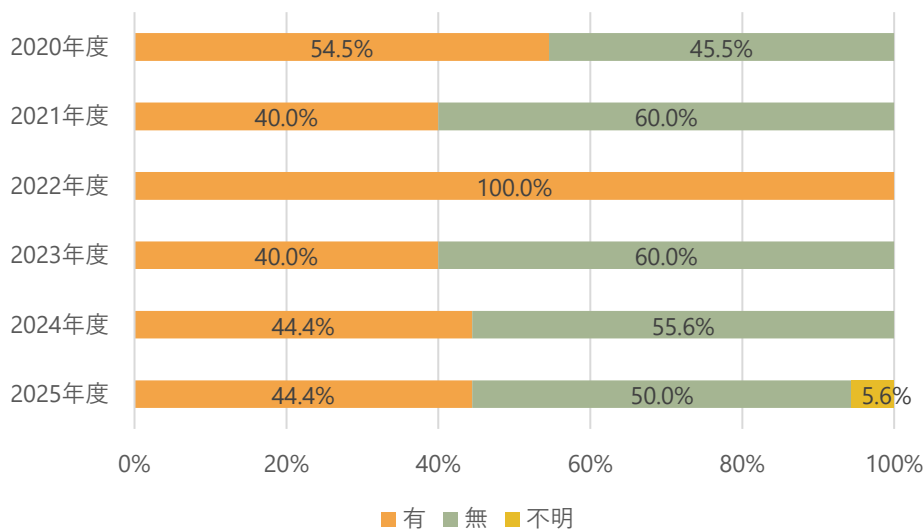


図 3-6 トレッキング利用者のルサ FH への立ち寄り状況の経年変化  
(2020 年度～2025 年度)

### <釣り>

釣り利用者のルサ FH への立ち入り状況の経年変化を図 3-7 に示す。釣り利用者は 2020 年度と 2022 年度を除いてルサ FH への立ち寄り率は 10%程度であり、例年トレッキング利用者と比較して低い傾向にある。

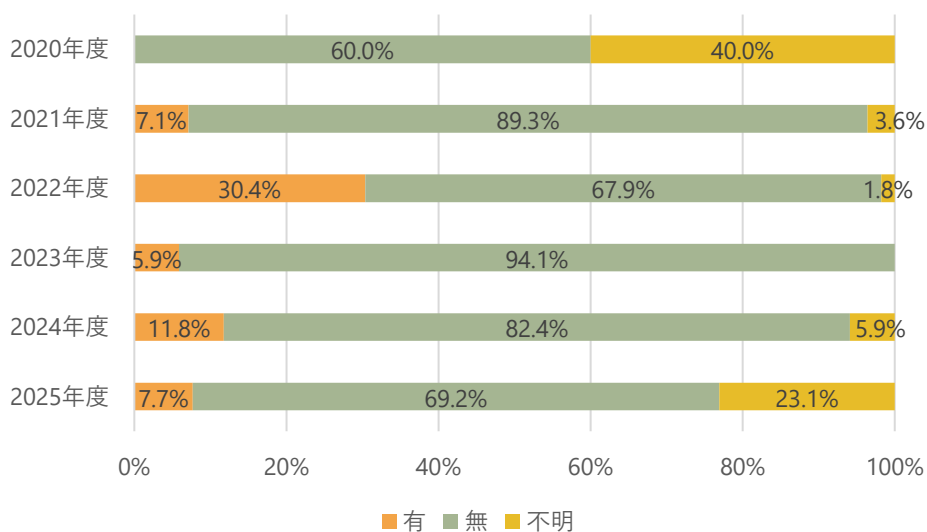


図 3-7 シーカヤック利用者のルサ FH への立ち入り状況の経年変化  
(2020 年度～2025 年度)

### 3-1-4 ルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化

ルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化を表 3-4 に示す。レクチャー受講が調査項目に追加されたのは 2023 年度のため、3 年分の変化を示している。2025 年度に事前にレクチャーを受講した利用者は半数以下であった。

以下からは利用形態別の経年変化の結果を示す。

表 3-4 利用形態別のルサ FH でのレクチャー受講数の経年変化

	シーカヤック（組）			トレッキング（組）			釣り（組）			合計		
	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明
2023 年度	2	5	0	4	6	0	0	34	0	6	45	0
2024 年度	0	1	1	6	12	0	0	16	1	6	29	2
2025 年度	1	0	0	8	9	1	0	10	3	9	19	4

#### <シーカヤック>

シーカヤック利用者のルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化を図 3-8 に示す。2023 年度のレクチャー受講率は 28.6%、2024 年度は 0%、2025 年度は 100%であった。2025 年度のシーカヤック利用者は 1 組のみであった。

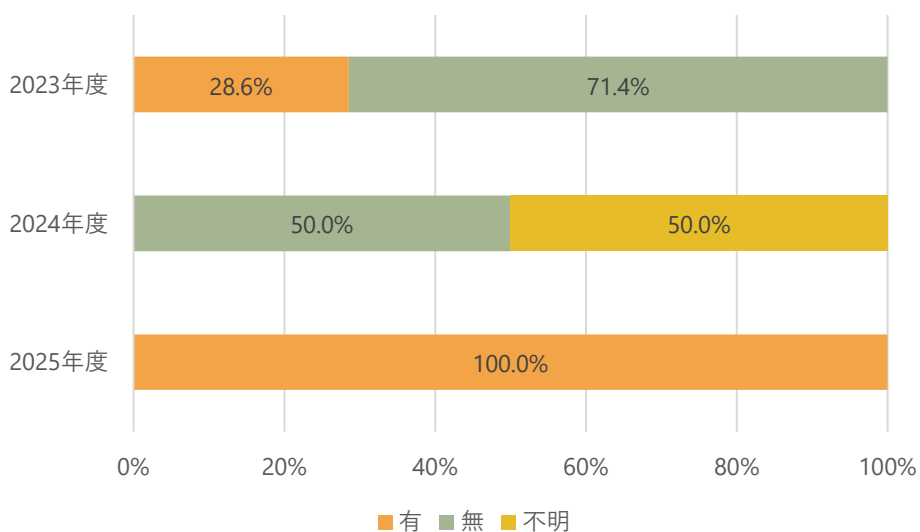


図 3-8 シーカヤック利用者におけるルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化 (2023 年度～2025 年度)

### <トレッキング>

トレッキング利用者のルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化を図 3-9 に示す。レクチャー受講率は過去 3 年間 40%前後で推移しており、他の利用形態と比較して高い割合であった。

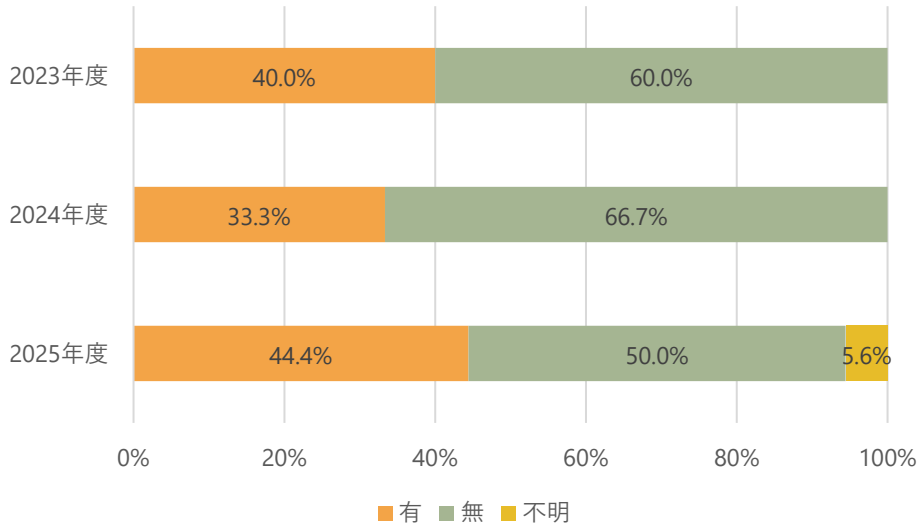


図 3-9 トレッキング利用者のルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化  
(2023 年度～2025 年度)

### <釣り>

釣り利用者のルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化を図 3-10 に示す。過去 3 年間のレクチャー受講率は 0%であり、利用形態別で最も低いレクチャー受講率であった。

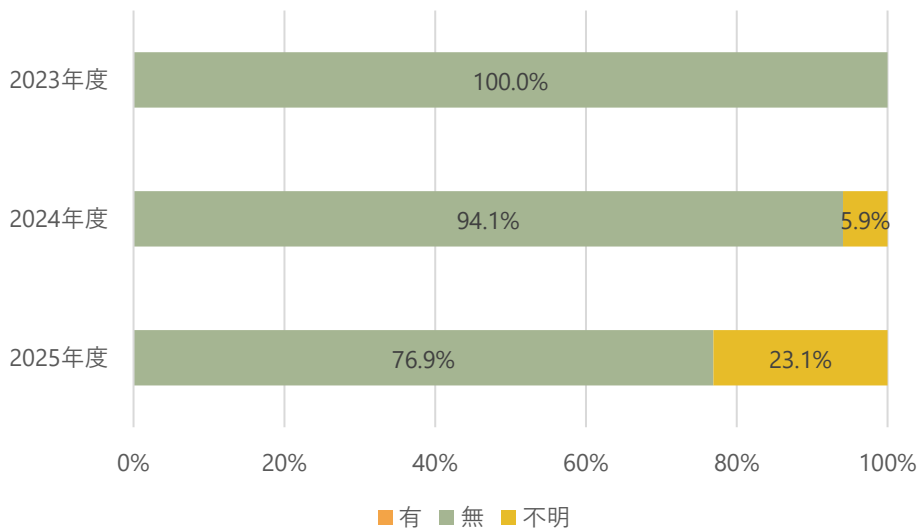


図 3-10 釣り利用者のルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化  
(2023 年度～2025 年度)

### 3-1-5 利用の心得またはシレココの認知状況

利用の心得またはシレココの認知状況の経年変化を表 3-5 に示す。2025 年度は昨年度と比較して利用者の総数は減少したものの、利用の心得及びシレココの認知件数は増加した。また、2025 年度は 2020 年度以降で利用の心得またはシレココを認知している利用者の割合が最も高かった。これは傾向として認知率の低い釣り利用者が減少し、相対的に認知率の高いトレッキング利用者が増加したためと考えられる。

以下からは利用形態別の経年変化を示す。

表 3-5 利用形態別の利用の心得またはシレココの認知状況

	シーカヤック（組）			トレッキング（組）			釣り（組）			合計		
	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明
2020 年度	5	1	0	8	1	2	0	5	5	13	7	7
2021 年度	4	0	0	7	8	0	6	21	1	17	29	1
2022 年度	4	0	0	7	0	0	9	46	1	20	46	1
2023 年度	2	5	0	4	6	0	0	34	0	6	45	0
2024 年度	2	0	0	10	8	0	1	13	3	13	21	3
2025 年度	1	0	0	13	3	2	1	9	3	15	12	5

#### <シーカヤック>

シーカヤック利用者の利用の心得またはシレココの認知状況の経年変化を図 3-11 に示す。2023 年度を除き、先端部地区を利用するシーカヤック利用者の多くが利用の心得及びシレココを認知していた。

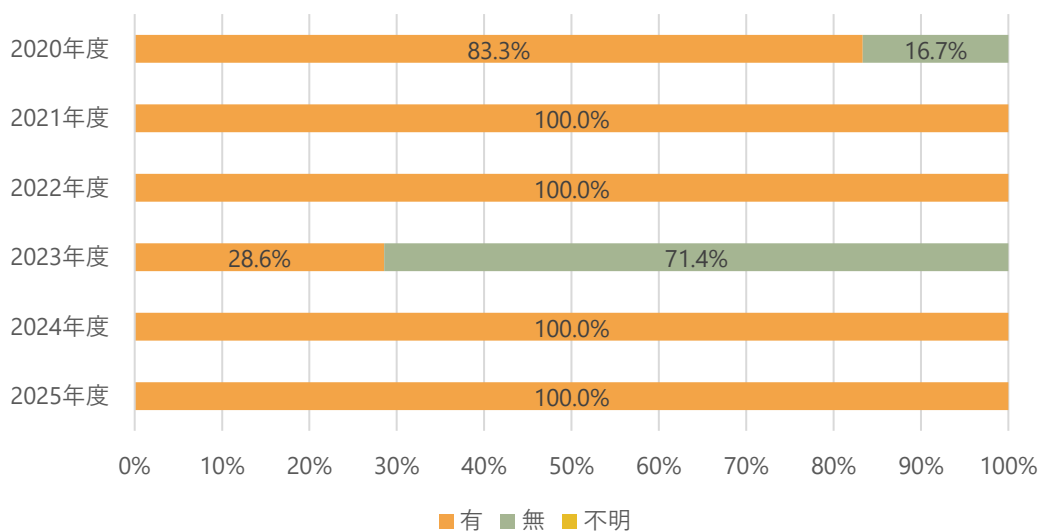


図 3-11 シーカヤック利用者の利用の心得及びシレココの認知状況の経年変化 (2020 年度～2025 年度)

### <トレッキング>

トレッキング利用者の利用の心得またはシレココの認知状況の経年変化を図 3-12 に示す。認知率は高い年度で 100% (2022 年度)、低い年度で 40.0% (2023 年度) であり、年度によりバラつきが大きかった。

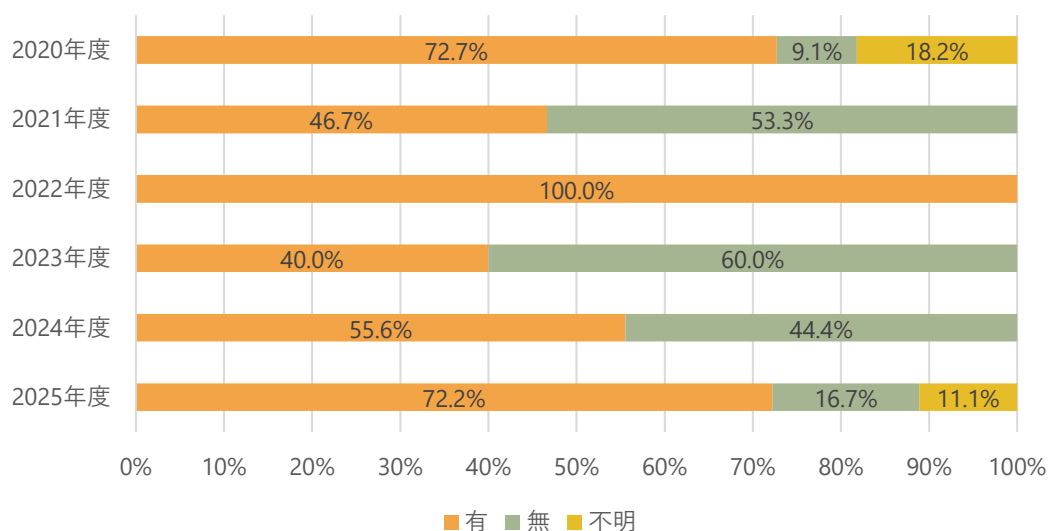


図 3-12 トレッキング利用者の利用の心得及びシレココの認知状況の経年変化 (2020 年度～2025 年度)

### <釣り>

釣り利用者における利用の心得またはシレココの認知状況の経年変化を図 3-13 に示す。釣り利用者のほとんどが利用の心得またはシレココを認知していない状況であった。

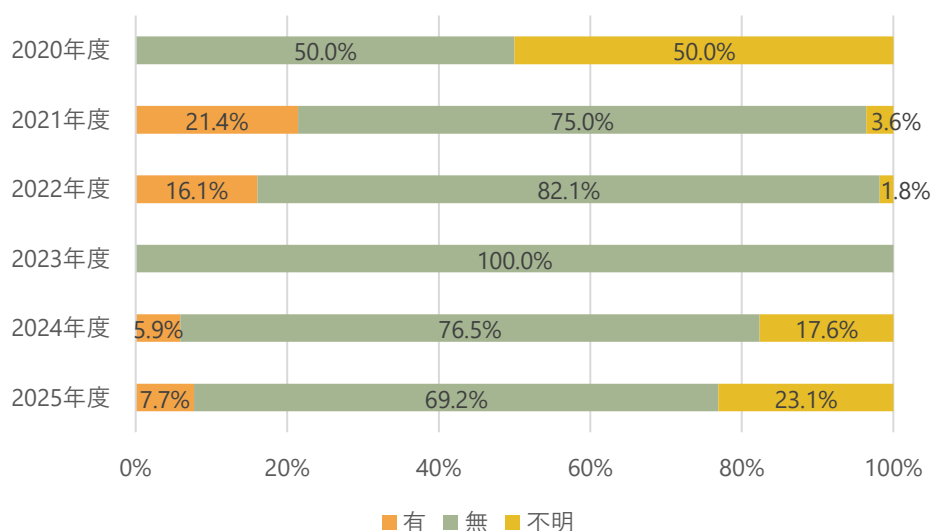


図 3-13 釣り利用者の利用の心得及びシレココの認知状況の経年変化 (2020 年度～2025 年度)

## 4. まとめと考察

### 2020 年度から 2025 年度における入域調査のとりまとめ

2020 年度から 2025 年度における利用形態別利用組数は、シーカヤック 24 組(9.2%)、トレッキング 79 組(30.3%)、釣り 158 組(60.5%)だった。釣り利用者は 2023 年度より減少が続いており、2025 年度においてはトレッキング利用組数(18 組)が釣り利用組数(13 組)を上回った。シーカヤック利用組数は 2024 年度の 2 組からさらに減少し、2025 年度は 1 組のみであった。

2020 年度から 2025 年度におけるルサ FH への立ち寄り状況は、シーカヤック利用者は 25～50%(利用者が 2 組、1 組だった 2024 年度、2025 年度を除く)、トレッキング利用者は 40～50%(2022 年度は 100%)、釣り利用者は 5～30%と、最も多いトレッキング利用者であっても半分に満たない年が大半だった。2023 年度から 2025 年度のレクチャー受講状況は、トレッキング利用者が 40%前後な一方、シーカヤックと釣り利用者のほとんどがレクチャーを受講していなかった。

### 相泊川の釣り需要の増加

2025 年度の釣り利用組数は本調査の調査日数が 8 日間になって以降過去最少の 13 組だった。その内およそ半数にあたる 6 組が相泊川を利用しており、この 6 組はいずれもヒグマ対策を講じていなかった。一方で本年の調査において相泊川以外の先端部地域を利用した釣り利用者は全組がヒグマ対策を講じており、利用者間のヒグマ対策に対する意識の差が見られた。

相泊川周辺では過去にヒグマ目撃情報が寄せられたこともある。この事実と本年の調査結果を踏まえ、相泊川周辺におけるヒグマ対策の必要性の普及啓発を強化する必要があると考えられる。普及啓発の際には、釣り利用者のルサ FH への立ち寄り率の低さを鑑み、SNS の活用等、ルサ FH 訪問者以外にも広くリーチする手法を用いる必要がある。

### 計画書の提出状況

2025 年度より相泊の入林簿は廃止された。本調査では、必須ではないものの、入林簿への記入に代わり、利用者の計画書の提出の有無、および提出先を調査した。その結果を以下に示す。

トレッキング利用者の 1 組が計画書を警察に提出した上で入林箱にも提出しているため、「トレッキング」の合計数はトレッキング利用組数の総数とは異なる。また、その他の項目は全て YAMAP やヤマレコ等 WEB サービス経由で計画書を提出したものであった。

表 4-1 利用形態別の計画書の提出の有無および提出先

利用形態 (組)	計画書					合計
	入林箱	警察	ルサFH	その他	未提出	
シーカヤック	0	0	1	0	0	1
トレッキング	4	3	2	4	6	19
釣り	0	0	0	0	13	13
合計	4	3	3	4	19	33

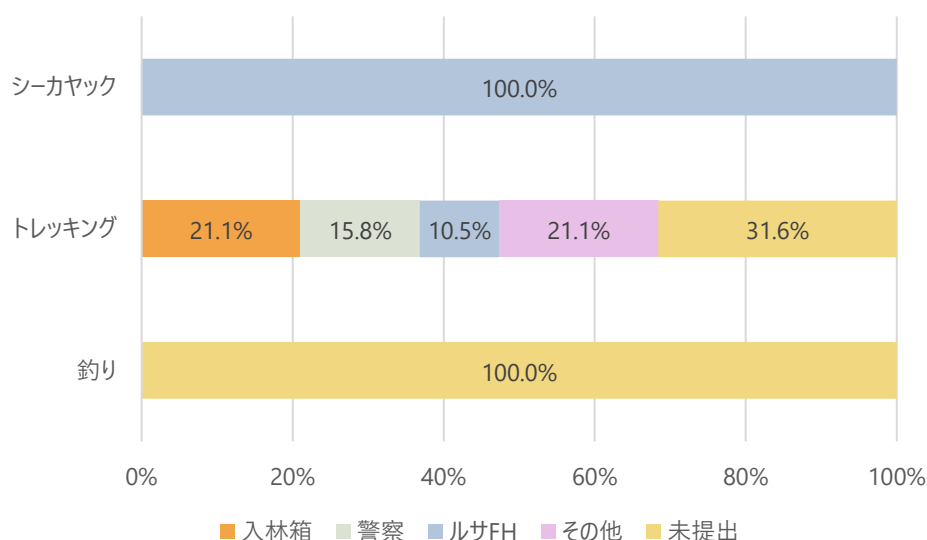


図 4-1 利用形態別の計画書の提出先

計画書の提出先の内、入林箱とその他(WEB)が同率で最多だった。知床半島先端部地区に限らず、近年はWEBでの計画書提出が広がっているものの、先端部地区においては入林箱にも根強い需要があることが伺える結果となった。なお、入林箱への計画書提出とカウントした4件は、いずれも本調査に先立ったトレッキング利用者が入林箱に残した手書きの計画書の余白に別の利用者が氏名、緊急連絡先、行動予定等を書き込んだものを入林箱への計画書提出として取り扱ったものである。

本調査において、先端部に入域した利用者の半数以上が計画書未提出であった。計画書の提出は捜索時の迅速な救助につながる他、事前に計画書を作成すること自体が計画の精査となり、計画者自身の安全性向上にもつながる。このことを踏まえ、先端部入域の際には計画書を作成、提出することを広く普及啓発する必要がある。

## 調査のあり方

本年の調査においては、以下の通り調査項目の一部変更を行った。

- 「利用形態」の様式変更：「利用形態」の解答欄に自由記述欄を設けることで、より多様な利用形態に対応できるようにした。
- 「移動手段」の項目削除：「利用形態」の改定に伴い「利用形態」に移動手段を含めて記述できるようになったため、「移動手段」の項目を削除した。
- 「目的地」の項目新設：過年度より移動経路の調査は行っていたが、聞き取り調査を円滑に進めることを目的に、質問項目の最初に「目的地」として独立した項目を新設した。

今年度より相泊の入林簿が廃止されたことに伴い、事前の計画書提出が以前より重要になっている。その点を踏まえ、本調査について以下の通り提案する。

- 「計画書の提出」の質問項目の調査必須化



令和7年度 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所 請負事業

事業名：令和7年度 知床半島先端部地区利用状況調査

事業期間：令和7（2025）年4月14日～令和7（2025）年12月19日

事業実施者：公益財団法人 知床財団

〒099-4356

北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別 531 番地



リサイクル適正の表示：紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料（Aランク）のみを用いて作製しています。